

岡崎久彦特別賞

螢 火

土田龍太郎

惜しめども避り^さがたき春の別なごりつきせぬものから、卯月に入るままに、道のべの山吹、闇垣の卯の花の目とまりて、橘の香をめでつつ時鳥のただ一聲の聞かまほしさに夜もすがらおきぬてはいにし世の人を偲び、軒の菖蒲^{あやめ}のそぼふる五月雨につれづれわぶるころにぞやうやく夏はたけゆくめる。

おほかた夏につけて人のめづるものくさぐさあり、とりどりにゆかしければ、いづれまされりとも定めがたきはさることなれども、いみじくあはれなるかた闇に飛ぶ螢のかつ點りかつ消ゆるはかなき火^まかげにしくものこそはなかるべけれ。

日本紀に螢火の光^{かがや}く神と繩^{きずな}聲^{こゑ}なす邪^あしき神とたぐへいへることのあれば、禍^{わざ}つことを螢によそふためしさらになしとはいふべからず。さればこの蟲ひたぶるにめでたきにしもあらざるめり。季夏之月腐草爲螢と月令に記せるはこの蟲たえて汚れなきにはあらざるがゆゑなるにや。螢を手^てにふれ身にそへては惡しき香うつりきぬと四季物語に説きたれば、その光ばかりうちながむるほどこそあらめ、なまじひに手にとりてみばなかなかうたてきこともあらむずるぞかし。

さはれこの蟲の人にあだなすことありとしも聞えず。かへりて世の人のことわざのまめまめしきかたを助くるよすがとなれるためしなきにあらざるべし。唐土^{もろこし}の車胤といふ人學びて倦まず。されども家貧しくて油だにえ購はざれば、夏には螢をあまた囊^{ふくろ}に盛りその明りにて夜ふくるまで書讀^{かみ}むことをえたり

きとぞ。車胤聚螢のこと孫康映雪とあはせて李潛の蒙求に説かれたれば知らぬ人ありとも思はれず。さればここに引かむもうるさし、記さでもありなましもどき言はむ人もあるらめども、さるはこのことひたぶるにもだしをらむもはたいかなればあらあら記しおくなり。李潛の説く車武子のこと晉書に載れるところにより、晉書の撰者また續晉陽秋によりてこれを述べたりと言へり。

光源氏の薄きかたびらに包みたまへる螢のさと光るままに玉鬘姫の姿ほの見えて兵部卿の宮の心ときめきせられたまひしことを述ぶる紫式部の書きざま巧みなることたとしへなし、世のなべての文作り人のまねぶともゆめまねびうべきはにはあらじとなむおぼゆる。この螢の巻に記せるは五月雨のころの六條院のさまなるこそいとしるけれ、螢を歌に詠むこともはら夏の盛りのみなりとも定めがたし。

しづけき闇に飛ぶ螢、見るに心はなぐさまでいとどあはれのいやまさることげに源重之の

音もせで思ひにもゆる螢こそ鳴く蟲よりもあはれなりけれ

と詠めりしがとし。この歌後拾遺集には夏の部に入りたり。重之集に諸本あれど、わが見し本には同じ歌秋の部に載りたれば、螢火をめづること夏には限るまじきにこそ。

業平朝臣とおぼしき昔男みまかりし女を偲びて、

行く螢雲のうへまでいぬべくは秋風吹くと雁に告げこせ

とぞ詠めりける。ときは水無月のつごもり袂涼しきころなりけり。夏はてて後に秋のはじめてくるにはあらず、秋ははや夏のうちにきざせるなりといふことはり、螢火につきて考ふるにぞげにさこそと思ひ知られぬる。元夢に螢火亂飛秋已近といふ句あれば、漢土にも秋の螢によせて作れる詩賦たえてなきに

はあらざるめり。

和泉式部かたみにものいひかはしける男のかれがれになりけるころ、貴船にまうで夜すがら籠りゐたるに、そのことなくなうたたもの悲しくて、うき思ひのつねよりもけに亂れゆきてはてさへ知れずぞなりにける。そのあまりにや川べに光る螢火はうち見るにただすごくして、わが魂のさながら闇に出で迷ふかとおどろかれぬれば、

もの思へばさはの螢もわが身よりあくがれいづる魂かとぞ見る

とふと詠めけるに、神も式部に御恵みをたれたまひけむ、御社の内より忍びたる御聲にて

奥山にたぎりておつる瀧つせの玉ちるばかりものな思ひそ

と御返しありけり。ほどへでよき験の式部が身の上にあるとぞ。千早振る神のかつは式部が才にめでたまひかつはそのひたぶる心を憐みたまひて下したまへるさきはひのいやちこなることくすしといひたふとしといふもおろかなり。

孚子内親王にさぶらひけるうなみ、かしこに住みたまへる敦慶親王にしのびて思ひかけたてまつりけれども、宮え知れたまはざりければ、螢を汗衫の袖に捕へて見せたてまつりけるとき

つつめどもかくれぬものは夏蟲の身よりあまれるおもひなりけり

とばかりうち詠めけること大和物語に見えたり。しのびてもしのびがたき戀心、けしきをだにいかではつかにても聞えてむとは望めども、もとよりいふかひなきわが身さるべきつてのあらばこそ。ただおのが思ひを螢火によそへむほかにさらにたづきとてなかりける名もなき女の童の胸のうちはかりやさ

しかりけむ、思ひやるだにいとほしくてほとほと涙も落ちぬべくこそおぼゆれ。

おほかた螢の歌とていみじきもの、業平と重之、和泉式部とうなぬ乙女の詠めりしにかぎるまじきはいふもさらなり。世々の集に入りぬる螢の歌いくそばくぞや、數へあぐるともなにかはせむ。いとめでたきかぎりすぐりて記し列ねむもかへりてこちたきわざなるべければそはせでもありなむとはおぼゆれども、さはれかの宇治山の喜撰法師の口遊くちすままれし一首またなくゆかしければ、そを引かでやみなましければなかなかくやしかりなまし。さればかの法師の歌のこといささか記しおくなり。

喜撰といふ人六歌仙の數に入りたれば名のみは高けれど今に残れるうたの數いとわづかにして二首三首にはすぎまじとおぼゆ。延喜の聖代にこの法師の歌はや多く失はれたりしこと紀貫之のものせる古今集假名序によりて知るべし。さはれ同じ集に入りたる

わがいほは都のたつみしかぞすむよを宇治山と人はいふなり

の一首ばかり今の代の人の口遊くちすまみとなることなきにしもあらぬは、京極黃門の小倉の山莊の色紙形に百首歌書かれしとき、この歌をも選えらび入れられたるがゆゑなるべし。されどこの歌さまでめでたしとおおぼえず。言葉のつづきととのほらで本末もとすゑとほらざるがごとくしてなにとやらむおぼつかなき詠よみざまなり。貫之ぬしもさ思はれしにや、假名序にてこの法師を論あげつらへるところには、言葉かすかにして初め終りたしかならず、いはば秋の月を見るに曉の雲にあへるがごとしとなむ記されたる。同じ法師とおぼしき人の名記せる書かみくさぐさあれども、述つぶるところさまで詳かならず、おほかたの行狀だにえ辿らぬはいとほいなし。

谷の螢火を詠める一首

木の間より見ゆるは谷の螢かもしさに海士あまの海べゆくかも

とて玉葉集の夏の部に入りたるは、喜撰の詠める題知らずとぞかの集には記されたる。同じ歌、藤原仲實の作れる古今集目錄と顯昭法師の著せる古今集注に基泉の歌とて引かれたれど文字たがへるところあり。玉葉集の奏覽、正和のころなればいたく世下れりとはいひつべかるめれども、一首の文字この集に載れるをもて正しとすべし。作者まことに宇治山の喜撰なるにや、たえて疑ひなしともいひがたかるめり。作者たれにてもあれ、この歌詠みしところやや高き岡の上なりけむ、海近しと見ゆれば宇治山にはあらざるべし。物の音とて聞ゆるは谷のせせらぎのみなれど、いとかそけきその聲のほの間ゆるにこそよもの静けさたえて聲なきにまさりてただならず、身にしむばかりなりけらし。

寢いもせで夜を明しかねたるわび人、いにしかたのことそぞろに思ひ出でらるるままに闇の奥をうちまもればなにとやらむ光れるものありてそのものとしも見えわかず、海遠からざれば釣する海士あまの點せる漁火いさひにもまがふれども、吹く風に消えせねば、谷間の螢のほのめくにてあるらし。さらずだになぐさめかめるわが心、いとど亂れてとりとむるべきかたぞなき。谷の螢は亡き人の魂たまかとも、はたおのが魂たまのやがてあくがれいでぬるかともあやしまれ、うつつの闇とわが心の闇とあやめもわかずなりゆけば、わが心ながらわが心ならぬ心地さへそひて、もの狂ほしきこといふはかりなし。

おほかた螢を詠める大和歌の今にのこれるがなかに、この一首にまされるものさらにありとも思はれず。この歌の詠みざまさまで巧めりともあやありともおぼえねども、心の深きことただならず、そこひも知

られねば、世のおぼろけの歌讀みのをさをさえ入るさかひにはあるべからず。幽玄といひ神秘といふもなほざりなり。ただあやしおそろしとばかりいひてやみなむにはしかじとこそ。

木の間よりの一首まことに喜撰の歌なりとせば、この宇治山法師、世のなみなみの歌の上手にはたぐへいふべからず。歌仙といふもかたほならむ。げに歌聖といひて仰がむにはばかりあらむやは。

古へのかしこき人の敷島の大和歌に詠めりし螢のこと、筆のすさびにまかせておろおろ書きつけはべりし拙き文、おのが拙き歌もて結びはべらむは、おほけなくも人わるへにも見ゆらめども、をりをりにわが詠みちらせし言の葉のやがて朽ちなむもさすがあいなし、せめて水莖の跡にだにしばしとどめてむとのはかなき心ざしにあはれみて、讀む人罪ゆるしたまひてよかし。

夢に見しおもかげよりもはかなきはうつつの闇の螢なりけり

ぬばたまの闇の螢は夢にだに入りこぬ人の魂かとぞ見る

石の上古き言の葉かきよせてふみみる道のしるべとぞする